

# 「未来へつなぐ」 ～いのち・まち・こころ～



自衛隊の給水車に並ぶ市民

**阪神・淡路大震災から20年経って**  
あの阪神・淡路大震災からもう20年になるとうとしています。忘れもしない平成7年1月17日午前5時46分に、都市直下型のマグニチュード7.3の大地震が起り、阪神・淡路地域を中心に、明石市から、東は大阪府にかけて広い範囲に大きな被害がおよびました。芦屋市は、全市域で壊滅的な大きな被害が発生し、死者444人、負傷者3700人余り、建物の全

壊4722棟(全体の30.6パーセント)、半壊4062棟(全体の26.3パーセント)、一部損壊4768棟(全体の31.1パーセント)と市内全体の88パーセントの建物が大被害を受けました。市の水道施設も貯水池、浄水場、送配水管、給水管まで甚大な被害を受け、1月17日の午前9時ごろまでは、未だかつてなかった全市断水という非常事態になりました。「応急給水」は当日の1月17日の午後から始まり、少ない職員でポリタンク(18リットル)を一部の病院、避難所へ応急給水を開始しました。1月18日からは、全国の自治体(101自治体)、自衛隊(1連隊)、民間団体(14団体)、延べ団体数1700団体、車輛数(3千台)、延べ人数(1万4000人)の支援をいただき、3月10日まで53日間にわたり「応急給水」を受けました。1月19日には船による給水支援

の申し出が海上保安庁・家島町・下津町からあり、船による給水基地ができ非常に助かりました。送配水管、給水管の「応急復旧」は市全域が断水状態の中で被害調査ができず、復旧の開始に手間取りました。本格的な復旧計画のめども立たない中で、1月19日に1自治体から始めとして、全国各地からの応援要望が殺到しました。そして1月23日に本格復旧計画が立ち、地元業者と全国48自治体、民間4団体、延べ5千7000人の応援を得て6週間後の2月27日にはやっと全市域を復旧することができました。近年の自然災害の多さから考えて、これからの

- 1「初動体制の早期確立」
- 2「広報活動」
- 職員との連絡網の確認と整備
- 「応急給水箇所、水道復旧区域」など市民に情報を知らせる

- 3「応急給水」
- ポリタンク(18リットル)の備蓄
- 川の水・井戸水・プール水の利用
- 応援自治体・団体の受け入れ体制
- 4「応急復旧」
- 管理画面の整備
- 応援自治体・団体の受け入れ体制



ポリタンクを手に並ぶ市民

## ●プロフィール 青木 昭(あおき あきら)氏

昭和34年に芦屋市役所入職。水道部工務課、下水道課に在籍し、震災発生時は水道部次長。平成13年3月に建設部長を定年退職。



※「芦屋川の歴史」は、「阪神・淡路大震災20年経って考えること」掲載のため、お休みとなります。ご了承ください。

## 《シリーズ》阪神・淡路大震災20年経って考えること 問い合わせ 企画課 ☎332127

阪神・淡路大震災から20年を迎え、当時の状況を知るかたがたにあらためてご自身の経験や20年経った今思うことを語っていただき、分野ごとの側面からこの20年を振り返ります。貴重な経験や教訓を市民全体で受け継ぎ、新しい芦屋のまちづくりにつなげていきたいと思ひます。第3回は「緊急対応」がテーマです。

### 緊急車両を支えた誇り

私の会社(ガソリンスタンド)は、昭和46年より芦屋市役所の南側、国道43号の西行きに面した場所です。営業してました。日頃より、芦屋市公用車・救急車・消防車などに給油等を行っており、当然の事ながら、元旦以外は休むことなく、すべての日の営業を行っていました。あの震災当日1月17日、すぐ近くで阪神高速が倒壊する中、私は会社のガソリンタンクなどの危険物施設が気になり、家族を残し朝8時ごろには出社し、すぐに施設の点検と会社内の整理に没頭しました。幸い危険物施設の破損はなく、営業室のガラスが少し破損している程度でした。そしてありがたいことに、私が会社に入った時にはすでに電気が通じていたのです。当然のことですが電気がないと燃料給油はできません。そうして、私の人生の中でも一番辛くて長い一日が始まりました。

午前10時ごろだったと記憶していますが、芦屋市役所より連絡があり、「燃料は出せませんか」という事でしたので、私は「昼ごろくらいから給油できますよ」と返事をした途端、切羽詰まった様子で、芦屋市が全責任を持つので全ての緊急車両に給油して欲しい」との事でした。私は「可能な限り給油します」と答えました。しかしその時の当社の燃料在庫は3分の1くらいしかなかったのです。震災の2日前、メーカにタンクローリーの発注をしていて当日に補給に来る予定でしたが、この災害の中来るはずありません。そのような中、緊急車両の燃料を確保するためにはやむなく一般車両の給油は止めなければなりません。給油所入口に、「緊急車両給油所」の表示をしましたが、一般車両も殺到して混雑し大変な状況でした。緊急車両の給油は昼間にして、一般車両にはその後深夜まで給油し続けました。

昼間の状況は、各都道府県からの消防車両、警察車両、機動隊バスなどが給油所入口から、1〜2キロメートルくらい隊列を組んで並んでいました。私は、朝早くから家族を残し、途中の惨たんたる風景を見ながら出社し、もう1人出社できた社員と2人で終わりの見えない給油作業を続け、気がつけば夜の10時を過ぎていました。その時、消防本部の隊員から冷たいおにぎり2個を頂き、そういえば朝から何も食べていなかったのだということにやっと気づきました。

震災時いろいろな緊急車両が給油にきました。後日、お話を聞く機会があった時、東京消防庁のかたがたは、震災時における被災住民の整理とした行動に感心されていた事が心に残っています。あの日、私どものガソリンスタンドが混乱することも滞りすることもなく、緊急車両に給油でき、一般車両より緊急車両を優先させることができたのは、震災当日、報道で私どもの給油所が緊急車両指定給油所になっていることを知らせたことで、その結果、メーカからの燃料補給が最優先になったからだと思います。震災当日の1月17日、タンクローリーの配車は来ることはできませんでしたが、翌日の18日の午前中、兵庫県警のパトカーの先導で当給油所にタンクローリーが補給にきました。こうしてスムーズに給油が行えたことは、周囲の協力だけでなく、常日頃より芦屋市の緊急車両に給油をしていたことで、非常時においても当社の「責任感が発揮できた結果でもあると思います。そしてこれらの経験は、震災時「緊急車両を支えた誇り」としていつまでも私の心に残っていくことでしょう。

## ●プロフィール 石本 章宏(いしもと あきひろ)氏

芦屋市生まれ。精道中学校卒業生。有限会社芦屋石油代表取締役社長。(特活)あしやNPOセンター理事長、芦屋観光協会副会長、芦屋市商工会理事の他、多くの団体役員を歴任。



### 都心に近くアクセス便利な「神戸空港」

神戸空港ネットワーク図

- 三宮 → JRで20分 → 大阪(梅田) → JRで30分 → 京都
- 三宮 → 阪神で40分 → 大阪(難波) → 近鉄で35分 → 奈良
- 神戸空港 → ポートライナーで18分 → 神戸-間宮ベイ・シャトルで30分 → 関西国際空港

ご搭乗の方は空港駐車場24時間まで無料  
2日目以降 1000円/日

神戸空港利用推進協議会  
http://www.kairport.co.jp/

### ご自宅の安全を確認するために 芦屋市の補助事業

## まずは簡易耐震診断から はじめてみませんか

対象住宅：昭和56年5月以前に着工した木造戸建 診断費用：診断費3万円の10%自己負担 3,000円

私たち一級建築士(兵庫県簡易耐震診断員)が芦屋市より依頼を受け、簡易耐震診断書を発行させていただきます

万一、耐震性能が不足していると診断され、耐震補強工事を希望される場合、兵庫県と芦屋市が支援する「耐震改修工事費補助金」を利用することも可能です

お気軽にご相談ください 06-6928-1613

塩見 英之 塩見 京子

一級建築士事務所 ヴィア パルトロ Via BARTOLO34  
兵庫県知事登録 第01A02938号  
兵庫県尼崎市武庫町3-19-15 ホームページ www.viabartolo34.com メールアドレス studio@viabartolo34.com